

平成20年度長期社会体験研修修了報告書

研修者名 丸山 みのり (小学校教諭)

研修先企業・部署名 上毛新聞社・編集局

1 研修内容 (下線は下半期)

- (1) 新入社員研修【4月1日～11日】(研修場所：上毛新聞本社)
入社式 会社概要・関連企業等の説明 パソコン、カメラ研修 記者クラブ見学 等
・新入社員と一緒に、記者として社会人としての心構えについて講話
- (2) 前橋支局【4月14日～6月4日、6月17日～30日、8月2日～31日、1月5日～2月28日】(研修場所：前橋市役所内記者クラブ)
前橋市内の展覧会・講演会・総会・市長表敬訪問・各種イベント等の取材及び記事作成
告知(お知らせ)記事作成
・一日2本の取材が基本。お知らせ記事を書くこともある。取材に合わせて時間を調整し、記事を書いて見ていただき、写真と原稿を本社に送る。
・本社から記事の問い合わせなどに対応・取材先への確認
- (3) 写真部【6月5日～16日】(研修場所：上毛新聞社本社)
県内のイベント(食育フェスタ)・絵解き写真・スポーツ関係取材同行 号外配布
・マニュアル操作で撮影 報道写真としての構図やアングルを変えての撮影技術の向上
- (4) 運動部【7月1日～8月1日、10月1日～11月3日】(研修場所：上毛新聞社本社)
高校野球群馬県大会・県中学生総合体育大会取材及び記事作成 スポーツ記録記事作成
野球・テニス・ゴルフ・ラグビー・陸上・サッカー・県民マラソンの大会取材及び記事作成
・スコアブック記録、スタンド・選手への取材 具体的な質問、知識の習得・下準備が必要
尾瀬研修(3日～1泊2日)
- (5) 高崎支社【9月1日～30日、11月5日～12月27日】
(研修場所：高崎市役所内記者クラブ)
高崎市内の展覧会・講演会・総会・地域行事・各種イベント等の取材及び記事作成
企画(びいぷる・ランチ探検隊・本の中のことば人物・高校最前線・あの街この店・元気がいちばん)の取材及び記事作成
- (6) 編集部【3月1日～17日；予定】(研修場所：上毛新聞社本社)
新聞の紙面作り パソコン操作でレイアウト 見出しをつける デスクとの調整

2 研修から学んだこと (→学校現場での還元策・参考点)

- (1) 地域に密着した企業努力
・地方紙の特色を生かした地ネタ中心の紙面を組み、読者サービスのために県内の様々なイベントに協賛するなど地域密着を目指した明確な経営ビジョンが示されている。地域に信頼される企業として県民へのアピール度が高い。→**地域との協力、情報発信の工夫**
- (2) 企業組織としての共同体制
・一つの記事が新聞の形になるまで、記者→デスク→編集と多くの人の手がかかっている。よりよい紙面作りを目指し、他の部と連携を図りながらの協力体制が整っており、調整担当がはっきりしている。休日の出番や役割分担が明確。記者の負担が大きい場合は、違う部署からの応援、フォロー体制が整っている。連絡、報告が徹底している。→**授業作り、学年経営、生徒指導、緊急時の対応等共同システム作りの構築、確認**

(3) 新聞記者の仕事から

- ・電話の応対、取材での質問や会話などで、相手が答えやすく気持ちよく話せる状況作りに努め、状況に応じて対応、共感する姿勢が必要。効率よく、目的、ねらいに沿った取材をする。
- ・知識の豊富さ、探求心など情報に対するアンテナの高さとそれを分析、判断する能力が必要。一つの事象を多様な言葉で表し、簡潔明瞭で読者に伝わる表現力が要求される。
- ・報道という仕事への使命感をもち、社会的倫理のもと正確な情報を提供する役割を担う。

→プロ意識、人としての倫理観、教員としての資質向上への努力

(4) 取材を通して

- ・様々な分野の方の話を書く中で、活動の内容とともにその人の生きざまや志の高さに触れ、感銘を受けることが多い。社会に貢献し、人として努力する姿、よりよく生きようとする姿勢、チャレンジ精神を学んだ。→目標づくり、生き方教育など進路指導、生徒指導
- ・これまでに関わりの薄かった分野や社会情勢について知る機会がもてた。学校現場では得られない知識が得られた。(芸術関係…絵画、陶芸、書道 福祉ボランティア関係 地域の催し、街おこし ・環境問題 ・政治、経済情勢…選挙、株価、世界情勢 等)

→会話の引き出しを多くもつ、情報収集の大切さ

(5) 学校教育との関連

- ・小学校の勤務経験しかない自分にとって、幼児教育から大学までの現状を知る機会ができた。様々な学校の取り組みや児童生徒の活躍の場面に触れ、改めて学校の置かれている立場を考える機会がもてた。→学校間連携、子供の成長の流れを見据えた指導、保護者へのアドバイス
- ・特別支援教育関連の取材も多く、社会的認知度や関心が高まっているのを感じた。

→子供の立場に立った支援の必要性、教材・教具の開発、保護者との協力

3 所感

初めは仕事の手順や取材の仕方、記事にするなど仕事をこなしていくことで精一杯だった。また生活サイクルも変わり、時間が不規則なスケジュールに戸惑うこともあったが、どの部署でも温かく迎えてもらい、親切に教えていただきながら仕事を進めることができ感謝している。取材を通して多くの人の生き方に触れ、地域社会を見られたことが貴重な財産になった。

(1) 記者から学んだ表現力向上のポイント

これまでの自分の作文指導は「内容をふくらませて書く」指導が中心で最後にまとめを述べるパターンだった。ところが、新聞記事は限られた文字数の中で必要事項を盛り込み、ポイントを絞って「わかりやすくすっきりした、興味を引く文章」でなければ読者には読んでもらえない。(逆三角形の構成) 同じ言葉は極力避け、別の言い回しを考えるなど「書く苦勞」を味わった1年だった。そんな中記者の方々の様子を見ると、一通りできあがった記事を何度も推敲し、必要のない言葉を削り、時には何パターンも構成を考え精査して原稿を書いている。

「推敲に時間をかける」ことが表現力向上に欠かせないと感じ、新たな作文指導のヒントになった。また、下準備をしての効率よい取材、視点を変えての表現、新聞作成の手順等、授業に生かしていきたい。

(2) 教員の役割の重要性と使命感

学校現場を離れ、教員としての自分を振り返るよい機会をいただいた。取材を通して教員という職業は社会的に高い価値を求められているのを感じた。一方で仕事内容の幅広さと多忙さの実情は、世間的にはあまり知られていないように思った。子供たちから「先生」と呼ばれる立場を考えると、改めて「自らを高め、人格を律し、人を大事にする気持ち」を必要とされる職業であると考え、将来を担う子供たちを指導する教員の役割の重要性を受け止め、使命感を持って、気持ちを新たに今後の指導に臨みたい。